

彼 第二

芥川龍之介

青空文庫

一

彼は若い愛蘭土人^{アイルランド}だつた。彼の名前などは言わずとも好い。

僕はただ彼の友だちだつた。彼の妹さんは僕のことを未だに^{いま}My brother's best friendと書いたりしている。僕は彼と初対面^{しよたいめん}の時、

何か前にも彼の顔を見たことのあるような心もちがした。いや、

彼の顔ばかりではない。その部屋のカミンに燃えている火も、火^ほ

かげの映^{うつ}つた桃花心木^{マホガニイ}の椅子^{いす}も、カミンの上のプラトオン全集も

確かに見たことのあるような気がした。この気もちはまた彼と話しているうちにだんだん強まって来るばかりだつた。僕はいつか

こう云う光景は五六年前の夢の中にも見たことがあったと思うようになった。しかし勿論そんなことは一度も口に出したことはなかった。彼は敷島しきしまをふかしながら、当然僕等の間あいだに起る愛蘭アイルラ土ンドの作家たちの話をしていた。

「I detest Bernard Shaw.」

僕は彼が傍若無人ぼうじやくふじんにこう言ったことを覚えている、それはふたりふたりとも数え年かずねんにすれば、二十五になつた冬のことだつた。……

二

僕等は金かねの工面くめんをしてはカツフエやお茶屋へ出入した。彼は僕

よりも三割がた雄おすの特性を具えていた。ある粉雪こなゆきの烈よるしい夜、僕等はカツフェ・パウリスタの隅のテエブルに坐っていた。その頃のカツフェ・パウリスタは中央にグラノフォンが一台あり、白は銅くどうを一つ入れさえすれば音楽の聞かれる設備になっていた。その夜よもグラノフォンは僕等の話にほとんど伴奏を絶ったことはなかった。

「ちよつとあの給仕に通訳してくれ給え。——誰でも五銭出す度に僕はきつと十銭出すから、グラノフォンの鳴るのをやめさせてくれつて。」

「そんなことは頼まれないよ。第一他人の聞きたがつている音楽を銭ぜにずくでやめさせるのは悪趣味あくしゆみじゃないか？」

「それじゃ他人の聞きたがらない音楽を金^{かね}ずくで聞かせるのも悪趣味だよ。」

グラノフォンはちょうどこの時に仕合せとぱったり音を絶^たててしまった。が、たちまち鳥打帽^{とりうちぼう}をかぶった、学生らしい男が一人、白銅^{はくどう}を入れに立つて行った。すると彼は腰を擡^{もた}げるが早い、ダム何^{なん}とか言いながら、クルウエットスタンドを投げつけようとした。

「よせよ。そんな莫迦^{ばか}なことをするのは。」

僕は彼を引きずるようにし、粉雪^{こなゆき}のふる往来へ出ることにした。しかし何か興奮した気もちは僕にも全然ない訣^{わけ}ではなかった。僕等は腕を組みながら、傘もささずに歩いて行った。

「僕はこう云う雪の晩などはどこまでも歩いて行きたくなるんだ。どこまでも足の続くかぎりは……」

彼はほとんど叱りつけるように僕の言葉を中断した。

「じゃなぜ歩いて行かないんだ？　僕などはどこまでも歩いて行きたくなれば、どこまでも歩いて行くことにしている。」

「それは余りロマンティックだ。」

「ロマンティックなのがどこが悪い？　歩いて行きたいと思いがら、歩いて行かないのは意気地なしばかりだ。凍死しても何でも歩いて見ろ。……」

彼は突然口調くちようを変え Brother と僕に声をかけた。

「僕はきのう本国の政府へ従軍したいと云う電報を打ったんだよ

。」

「それで？」

「まだ何^{なん}とも返事は来ない。」

僕等はいつか教^{きょう}文^{ぶん}館^{かん}の飾り窓の前へ通りかかった。半^{なか}ば硝^ガ子^{ラス}に雪のつもった、電燈の明るい飾り窓の中にはタンクや毒^{どく}瓦斯^{ガス}の写真版を始め、戦争ものが何冊も並んでいた。僕等は腕を組んだまま、ちよつとこの飾り窓の前に立ち止まった。

「Above the War——Romain Rolland……」

「ふむ、僕等にはaboveじゃない。」

彼は妙な表情をした。それはちようど雄^{おんどり}鶏^{トリ}の頸^{くび}の羽根を逆^{さか}立^だてるのに似たものだった。

「ロオランなどに何がわかる？　僕等は戦争の amidst にいるん

だ。」

独逸ドイツに対する彼の敵意は勿論僕には痛切ではなかった。従つて僕は彼の言葉に多少の反感の起るのを感じた。同時にまた酔よの醒さめて来るのも感じた。

「僕はもう帰る。」

「そうか？　じゃ僕は……」

「どこかこの近所へ沈んで行けよ。」

僕等はちようど京きよう橋ばしの擬宝珠ぎぼしの前に佇たたずんでいた。人氣ひとけのな
い夜更よふけの大根河岸だいこんがしには雪のつもった枯れ柳が一株、黒ぐろと澱よど
んだ掘割りの水へ枝を垂らしているばかりだった。

「日本にほんだね、とにかくこう云う景色は。」

彼は僕と別れる前にしみじみこんなことを言つたものだつた。

三

彼は生憎あいにく希望通りに従軍することは出来なかつた。が、一度ロンドンへ歸つた後のち、二三年ぶりに日本に住むことになつた。しかし僕等は、——少くとも僕はいつかもうロマン主義を失つてゐた。もつともこの二三年は彼にも変化のない訣わけではなかつた。彼はある素人しろうとげしゆく下宿の二階に大島おおしまの羽織や着物を着、手あぶりに手をかざしたまま、こう云う愚痴ぐちなどを洩らしていた。

「日本もだんだん亜米利加化するね。僕は時々日本よりも仏蘭西に住もうかと思うことがある。」

「それは誰でも外国人はいつか一度は幻滅するね。ヘルンでも晩年はそうだったんだろう。」

「いや、僕は幻滅したんじゃない。illusionを持たないものにdisillusionのあるはずはないからね。」

「そんなことは空論じゃないか？　僕などは僕自身にさえ、——未だにillusionを持っているだろう。」

「それはそうかも知れないがね。……」

彼は浮かない顔をしながら、どんよりと曇った高台の景色を硝子戸越しに眺めていた。

「僕は近々上海の通信員になるかも知れない。」

彼の言葉は咄嗟の間にいつか僕の忘れていた彼の職業を思い出させた。僕はいつも彼のことをただ芸術的な氣質を持った僕等の一人に考えていた。しかし彼は衣食する上にはある英字新聞の記者を勤めているのだった。僕はどう云う芸術家も脱却出来ない「店」を考え、努めて話を明るくしようとした。

「上海は東京よりも面白いだろう。」

「僕もそう思っているがね。しかしその前にもう一度ロンドンへ行つて来なければならぬ。……時にこれを見せたかしら？」

彼は机の抽斗から白い天鵝絨の筐を出した。筐の中にはいつているのは細いプラティナの指環だった。僕はその指環を手にと

つて見、内側にほ離つてある「桃子ももこへ」と云う字にほほえ頬笑まない訣わけには行ゆかなかつた。

「僕はその『桃子へ』の下に僕の名を入れるようにちゆうもん註文した
 ンだけれど。」

それはあるいは職人の間違いだったかも知れなかつた。しかし
 またあるいはその職人が相手の女の商売を考え、ことさ故らに外国人の
 名前などは入れずに置いたかも知れなかつた。僕はそんなことを
 気にしない彼に同情よりもむしろ寂しさを感じた。

「この頃はどこへ行っているんだい？」

「柳やなぎばし橋だよ。あすこは水の音が聞えるからね。」

これもやはり東京人の僕には妙にきどく気の毒な言葉だった。しかし

彼はいつの間にか元氣らしい顔色に返り、彼の絶えず愛読している日本文学の話などをし出した。

「この間 たにざきじゅんいちろう 谷崎潤一郎の『悪魔』と云う小説を読んだがね、あれは恐らく世界中で一番汚いことを書いた小説だろう。」

（何箇月かたった後、のち僕は何かの話の次手に『悪魔』の作家に彼の言葉を話した。するとこの作家は笑いながら、無造作に僕にこう言うのだった。——「世界一ならば何でも好い。」！）

「『ぐびじんそう 虞美人草』は？」

「あれは僕の日本語じゃ駄目だ。……きようは飯ぐらいはつき合えるかね？」

「うん、僕もそのつもりで来たんだ。」

「じやちよつと待ってくれ。そこに雑誌が四五冊あるから。」

彼は口笛を吹きながら、早速^{さつそく}洋服に着換え出した。僕は彼に背^せを向けたまま、漫然とブツク・マンなどを覗^{のぞ}いていた。すると彼は口笛の合い間^まに突然短い笑い声を洩らし、日本語でこう僕に話しかけた。

「僕はもうきちりと坐ることが出来るよ。けれどもズボンがイタマシイですね。」

四

僕が最後に彼に会ったのは上^{シャンハイ}海のあるカッフエだった。

（彼はそれから半年^{はんとし}ほど後^{のち}、天然痘^{てんねんとう}に罹^かつて死んでしまった）僕等は明るい瑠璃燈^{るりとう}の下^{した}にウヰスキイ炭酸^{たんさん}を前にしたまま、左右のテエブル^{むらが}に群^{おおぜい}つた大勢^{なんによ}の男女を眺めていた。彼等は二三人の支那人^{シナじん}を除けば、大抵は亜米利加人^{アメリカ}か露西亞人^{ロシア}だった。が、その中に青磁色^{せいじいろ}のガウンをひっかけた女が一人、誰よりも興奮してしゃべっていた。彼女は体こそ痩^やせていたものの、誰よりも美しい顔をしていた。僕は彼女の顔を見た時、砧^{きぬたで}手のギヤマンを思い出した。実際また彼女は美しいと云つても、どこか病的だったのに違いなかった。

「何^{なん}だい、あの女は？」

「あれか？ あれは仏蘭西^{フランス}の……まあ、女優と云うんだろう。二

ニイと云う名で通とおっているがね。——それよりもあの爺じいさんを見ろよ。」

「あの爺さん」は僕等となりの隣に両手に赤葡萄酒あかぶどうしゅの杯さかずきを暖め、バンドの調子に合せては絶えず頭を動かしていた。それは満足そのものと云つても、少しも差さ支しえつかない姿だった。僕は熱帯植物の中からしつきりなしに吹きつけて来るジャツズにはかなり興味を感じた。しかし勿論幸福らしい老人などには興味を感じなかった。「あの爺さんは猶太人ユダヤだがね。上シャンハイ海ハイにかれこれ三十年住んでいる。あんな奴は一体どう云う量りようけん見けんなんだろう？」

「どう云う量見でも善いいじゃないか？」

「いや、決して善よくはないよ。僕などはもう支那に飽き飽きして

いる。」

「支那にじゃない。上海にだろう。」

「支那にさ。北京にもしばらく滞在したことがある。……」

僕はこう云う彼の不平をひやかさない訣には行かなかった。

「支那もだんだん亜米利加化するかね？」

彼は肩を聳かし、しばらくは何とも言わなかった。僕は後悔

に近いものを感じた。のみならず気まずさを紛らすために何か言

わなければならぬことも感じた。

「じゃどこに住みたいんだ？」

「どこに住んでも、——ずいぶんまた方々に住んで見たんだがね。

僕が今住んで見たいと思うのはソヴィエツト治下の露西亜ばかり

だ。」

「それならば露西亜へ行けば好いのに。君などはどこへでも行かれるんだろう。」

彼はもう一度黙ってしまった。それから、——僕は未だにはつきりとその時の彼の顔を覚えていゝる。彼は目を細めるようにし、突然僕も忘れていた万葉集まんようしゅうの歌をうたい出した。

「世の中をうしとやさしと思えども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。」

僕は彼の日本語の調子に微笑しない訣には行かなかつた。が、妙に内心には感動しない訣にも行かなかつた。

「あの爺じいさんは勿論だがね。ニニイさえ僕よりは仕合せだよ。何

しろ君も知っている通り、……」

僕は咄嗟とつさに快濶かいかつになった。

「ああ、ああ、聞かないでもわかつているよ。お前は『さまよえ

る猶太人』だろう。」

彼はウヰスキイ炭酸たんさんを一口ひとくち飲み、もう一度ふだんの彼自身

に返った。

「僕はそんなに単純じゃない。詩人、画家、批評家、新聞記者、

……まだある。息子むすこ、兄あに、独身者どくしんもの、愛蘭土人アイルランド、……それから

氣質きしつ上のロマン主義者、人生觀上の現實主義者、政治上の共產主

義者……」

僕等はいつか笑いながら、椅子いすを押しつけて立ち上っていた。

「それから彼女には情人じようじんだろう。」

「うん、情人、……まだある。宗教上の無神論者、哲学上の物質主義者……」

夜更よふけの往来は霽もやと云うよりも瘴氣しやうきに近いものにこもっていた。それは街燈の光のせいか、妙にまた黄色きいろに見えるものだった。僕等は腕を組んだまま、二十五の昔と同じように大股おおまたにアスファルトを踏んで行つた。二十五の昔と同じように——しかし僕はもう今ではどこまでも歩こうとは思わなかった。

「まだ君には言わなかったかしら、僕が声帯せいたいを調べて貰つた話
は？」

「上シャンハイ海でかい？」

「いや、ロンドンへ帰った時に。——僕は声帯を調べて貰ったら、世界的なバリトオンだったんだよ。」

彼は僕の顔を覗きこむようにし、何か皮肉に微笑していた。

「じゃ新聞記者などをしているよりも、……」

「勿論オペラ役者^{やくしゃ}にでもなっていれば、カルウソオぐらいには行っていたんだ。しかし今からじゃどうにもならない。」

「それは君の一生の損だね。」

「何、損をしたのは僕じゃない。世界中の人間が損をしたんだ。」
僕等はもう船の灯の多い黄浦江^{こうほこう}の岸を歩いていた。彼はちよつと歩みをとめ、顚^{あご}で「見ろ」と云う合図^{あいず}をした。靄^{もや}の中に仄^{ほの}めいた水には白い小犬の死骸が一匹、緩い波^{ゆる}に絶えず揺^ゆすられてい

た。そのまた小犬は誰の仕業か、頸のまわりに花を持った一つづりの草をぶら下げていた。それは惨酷な気がすると同時に美しい気がするのにも違いなかった。のみならず僕は彼がうたった万葉集の歌以来、多少感傷主義に伝染していた。

「ニニイだね。」

「さもなければ僕の中の声楽家だよ。」

彼はこう答えるが早い、途方もなく大きい噓めをした。

五

ニイスにいる彼の妹さんから久しぶりに手紙の来たためである

う。僕はつい二三日前まえの夜、夢の中に彼と話していた。それはどう考えても、初対面の時に違いなかった。カミンも赤あかと火を動かしていれば、そのまた火ほかげも桃花心木マホガニイのテエブルや椅子いすにうつ映うつっていた。僕は妙に疲労しながら、当然僕等の間あいだに起る愛蘭アイルラ土ンドの作家たちの話をしていた。しかし僕にのしかかって来る眠ね気むけと闘うのは容易ではなかった。僕は覚束おぼつかない意識の中にこう云う彼の言葉を聞いたりした。

「I detest Bernard Shaw.」

しかし僕は腰かけたまま、いつかうとうと眠ってしまった。すると、——おのずから目を醒さました。夜よはまだ明け切らずにいるのであろう。風呂敷ふろしきに包んだ電燈は薄暗い光を落している。僕は

床の上に腹這いになり、妙な興奮を鎮めるために「敷島」に一本火をつけて見た。が、夢の中に眠った僕が現在に目を醒ましているのはどうも無気味でならなかった。

（大正十五年十一月二十九日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彼 第二

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>